

The University Times

December 2014 Vol. 37

<http://jtimes.jp/utimes>

produced by IELTS by Eiken × The Japan Times ©THE JAPAN TIMES, LTD. 2014

CONTENTS

■ Global Leader's Voice 辰野まどかさん (一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト 事務局長)	1 2	■ Journalist's Eye 羽田空港に日本初のホテル誕生 日本一肌が美しいのは何県?	6	■ Key to Success 留学トラブル解決策/ Book Review	10	■ IELTS World IELTSテストのコツ	13
■ Studying Abroad in the U.S.A 私の米国留学	3	■ News in English 英文記事を読んでみよう	7	■ Scholarship List 奨学金情報	11	■ IELTS World IELTS 対策コースナビ/攻略本	14
■ University's Challenge 東京農工大学	4 5	■ Visit a Global Company 楽天株式会社	8 9	■ IELTS World IELTS Hot News	12	■ Study Abroad Benefits 留学で培う3つの力	15

Global Leader's Voice

グローバルリーダーインタビュー

世界と戦うのではなく 世界をつなげる人になろう

Vol.7 辰野まどかさん 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト 事務局長

高校時代にスイスの国際会議に参加したことがきっかけで、世界平和やグローバル教育の実現を志した辰野まどかさん。現在は、一般社団法人グローバル教育推進プロジェクトで、人と人、人と世界をつなぐ活動を世界中で展開している。辰野さんが思い描く、真のグローバル人材とは――。

幼少期から積み重ねた 家庭での国際交流体験

幼い頃から家庭にたくさんの外国人がホームステイしていたという辰野まどかさん。母親が幼い子どもたちのためを思って外国人を受け入れていたため、異文化を体験する機会が多く、当時から国際交流にはまったく抵抗がなかったそうだ。

「タイやリベリア、フィジーなどいろいろな国籍の方がホームステイしてきました」。辰野さんは、当時の家庭の様子をこう振り返る。

「毎回、外国の方が我が家に泊まるときは、『生まれ故郷の郷土料理を作る』というルールがあったんですよ。フィジーの方が郷土料理を作ることになったときに、我が家の庭を見て『この庭では作れない』とおっしゃったんです。よくよくお話を聞くと、彼女の住む地域では、地中に穴を掘って、そこに焼けた石を置き、バナナの葉などを敷き詰めて食材を載せ、土をかぶせて蒸し焼きにする、という伝統的な調理方法があるとのこと。我が家の庭では狭すぎてできませんでした(笑)」

またリベリア人の女性が家に来たときは、

母語ではない英語を教えてくれたそうだ。

「母が、スピーキングができるなら娘に教えて、と頼んでくれて。でも文法的な間違いが多く、外国人がみな英語ができるわけじゃないんだと、非常に驚いたことを覚えています」

このように、小さい頃から国際交流を身をもって体験していた辰野さんだが、以前から英語が得意だったわけではなかった。

「進学した学校には帰国子女が多く、彼らにはどうあがいても敵わない。日本人なら日本語ができればいいじゃないかと、中高時代は英語の勉強が嫌いでした(笑)」

人生をがらりと変えた 誕生日プレゼント

英語嫌いで過ごしてきた辰野さんを変えるできごとが起きたのは、17歳の誕生日のこと。母親からもらった衝撃的なプレゼントがきっかけだった。それは、「スイスで行われる国際会議に参加できる権利」だ。

「夏休みにスイスで3週間に渡って行われる国際会議に、母が申し込んでいたんです。それはもう大変な体験でした。国際会議での公用語である英語もフランス語もできない



し、会議で必要となる近代史などの知識もほとんどない。右も左もまったく分からない状態で、世界中から集まってきた人々と世界の平和について毎日話し合いをしました」

その会議を通して気づいたことは多々ある。神風特攻隊の隊員には家族や恋人を想う心がないと、他国に勘違いされていたこと、日本

の終戦記念日は、国際会議場にいた国の人たちにとっては「日本に勝った日」であること……。

「今でも鮮明に覚えているのは、会議最終日のことです。参加者全員が一言ずつ、今回の会議の感想を述べていくことになりました。私は、平和のために話し合いをしていく場が今後も続いていくといいと思います、

と言ったんです。そうしたら、参加者のなかでも最年長と思いき女性に、がつんと怒鳴られました。『何を言っているの！あなたが続けていくんじゃない！』と」

この女性の発言は非常に重みのある一言だった。これをきっかけに、辰野さんはその後、さまざまな活動に身を投じることになる。高校生ながら、大学生や社会人が参加する勉強会に参加したり、ボランティア活動のため遠方まで赴いたりした。この頃から、将来はグローバル教育を通じて世界の平和に貢献したい、と夢を描き始めた。

「17歳での国際会議への参加が、まさに私の人生におけるターニングポイントでした」

初心に戻って 米国の大学院へ留学

大学生になり、辰野さんの社会貢献活動への熱意は、さらに加速する。

「大学を1年間休学し、世界各地から集まった120人のメンバーで世界80都市を巡るツアーに参加しました。訪れる先々で、ボランティア活動とミュージカル公演を行うのです。宿泊はすべてホームステイで、その手配も自分たちでした。町で会う人々に声をかけ、自分たちの活動を説明して、ホームステイ先を見つけます。まさしく、『国際交流千本ノック』でしたね」

大学卒業後はコーチングのコンサルティングを専門的に行う企業に就職した。大学ではグローバル教育を専攻した辰野さんが、コンサルティング会社を選んだ意図とは――。

「当時、知り合いが立ち上げたNPO法人や企業が倒産する事件が、いくつか重なったことが原因です。何をすることもビジネスを知っているべきだと思いました。1年間のツアーのつながりで、アメリカで出会ったコーチングに興味を持っていたので、当時、日本において、その分野でリードしていた会社を選びました」

ここでは、NPO法人の立ち上げや広報など、経理以外の業務はすべて経験した。3年間働いたら大学院に行こう、と考えて就職したが、仕事が楽しすぎて休みも取らずに働き続けたという。そんな辰野さんを、初心に引き戻したのは、友人たちの言葉だ。辰野さんの誕生日パーティーで、友人たちが学生時代に自分が語っていた夢を覚えていて、いつ実現するか聞いてきたからだ。

「とても悩みましたが、最終的には会社を辞める決意を固めました。希望していた大学院には会社を辞めてから訪れ、まだ語学(英語)力証明の試験は受けていないけれど、どうしてもこの学校に進学したいのだと直談判しました」

辰野さんが進学先を選んだのは、SIT Graduate Institute と呼ばれるアメリカのバーモント州にある大学院。グローバル教育の実地教育や体験型学習で名高い大学院で、卒業後は国連やNPO法人などの現場で働く人が多い。

「テキストを開いた瞬間にわくわくしたことは、今でも忘れられません。机上での英語の勉強に対する苦手意識は払拭しきれていま



せんでしたが、自分の好きなことを学べる環境で、勉強に打ち込むことができました」

ここで、辰野さん流の、勉強に対するモチベーションを向上させる方法を伺った。

「留学中は、その日に学んだことを日本語でブログに書き、外に発信していました。実は、日本人のパスポート保持率は25%程度ととても低い。つまり、海外に全然出ていないのです。私は数少ない海外組の一人だから、日本人に日本語で海外の情報を届けることがミッションだと強く感じました。そうすることで、能動的に授業に参加でき、自分の勉学に対するモチベーションの向上にもつながりました。ぜひ、これから海外で学ばれる方にもおすすめしたいですね」

GiFT を立ち上げ 地球市民の育成に注力

現在、辰野さんは、一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(以下、GiFT)を立ち上げ、事務局長を務めている。

「GiFTは、グローバル教育の体験の場を日常の中につくり、その在り方を広めて行くことをひとつの使命として、さまざまな活動を行っています。例えば海外では、一緒に教育プログラムを作るパートナーを見つけ、日本の学生を送り出し、現地の学生と協力して新たなものを生み出す場を作る、というプロデュースをしています」

投資だけをしてくれるスポンサーを募るのではなく、プログラムなどを「共に創る」ことができるパートナー探しが必須だ。

辰野さんは、「地球市民というアイデンティティを意識するのは、早ければ早いほど良い」と言う。国という枠組みを超えて地球規模で立ち向かう必要のある課題に、他者と関わりながら新たな解決策を生み出せる人こそが、地球市民なのだ。

11月上旬に名古屋で開催された「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」では、地球市民というキーワードが当たり前のように使われていたとい

う。世界48カ国のESDに取り組むユースリーダーが集まったESDユース・コンファレンスにおいては、「国」という概念はなく「地球」という単位が当たり前用いられていた。

「日本の47都道府県の代表が集まって、『さて、これから日本をどうしようか』という議論をするのと同じです。そして、そこに集まった人々は、『私たちは地球市民である』ということが共通項となる。早いうちにその視点を身につけておけば、もっと自由に、世界にアクセスすることができると思います」

2013年12月には、早稲田大学で開催された「Go Global Japan EXPO 2013」(文部科学省などが主催)で、来場者参加型のワークショップ「ロールモデルカフェ」を企画した。グローバルリーダー育成スクールのIGSと広告会社アサツーティ・ケイの統計では、「自分はもうグローバル人材になることはできない」と思っている高校生の割合が、なんと55%にも上るといふ。ロールモデルカフェは、そんな高校生たちにグローバル人材をもっと身近に感じてほしい、という願いから生まれたものだ。

「10名ほどの高校生が、世界で活躍しているロールモデルを囲みます。ロールモデルの方には、生まれてから現時点までの『人生史』を語ってもらう。人生における浮き沈みを見せることで、高校生にとっては親近感がわきます。最後には、参加している高校生にも、どんなロールモデルになりたいか、自分の未来について考えてもらいます」

このプログラムの始まりと終わりでは、高校生の表情が如実に変わるそうだ。

ほかにも、日本に来ている外国人と日本人で人生を語り合う「Diversity Dialogue」という場を提供している。

「壮絶な生い立ちの人や、実は意外とそうでもない人。話をしないとその人の背景は分かりません。人はとても深い生き物ですが、見えているのはほんの一部。見た目以外のことに気づくことで、想像力が働きます。今後初めて会った人にも、それを応用できるよ

うになってもらうことが、本企画の狙いです」

自分との対話を通して 世界をつなぐ存在に

辰野さんの定義する「グローバル人材」とは、どんな要素を持った人だろうか。

「さまざまな青年育成事業に関わってきましたが、常に思うのは、世界には多種多様な強みを持った人がいて、リーダーの種類にもいろいろあるということです。みんなの前に出るリーダーもいれば、それを後で支えるリーダーもいる。大事なことは、その人が自分の強みを十分に理解していて、それをどのように生かすことでその場に貢献できるのか、ということを知っていることです。若いうちに、『千本ノック』の要領でさまざまな場所に行って多くの経験を積み、自分と向き合い、対話をしていくことが必要です」

自分と向き合っただけで対話をするのは、GiFTが地球市民を育成する際に必要不可欠としている「Grounding = 自分を知り、受け入れる」という作業にもつながるものだ*1。

さらに辰野さんは、グローバル人材は決して世界で戦う存在ではないともつけ加える。今日では、「世界に負けるな、後れを取るな」と日本人を叱咤激励する風潮にあるが、それには疑問を抱いていると語る。

「日本人は一般的な傾向として、平和主義で真面目なところがあります。そういった良いところを改めて見直し、世界と戦うのではなく、調整役として平和を作り、世界をつなぐ人材として外に出てほしい。日本人が来て本当に良かったと言われる立場になるべきです。そのほうが、長い目で見れば、みんなが笑顔で平和に生きていく環境が持続するのではないかと思います」

そんな辰野さんが、一冊の本をすすめてくれた。パウロ・コエリョの『アルケミスト 夢を旅した少年』だ。

「バックパッカーの方がよく読んでいます。羊飼いの少年が旅をしながら『人生とは何なのか』を模索するストーリー。ぜひ若い読者のみなさんに読んでほしいですね」

辰野さんのスピリットにも、どこか通じるところがある物語だ。

(英検グローバルリーダー研究グループ
伊藤南美)

*1
GiFTは日本発の「地球市民(グローバル人材)」を世界に広めることを目的に活動する。「ダイバーシティへの適応力を磨く4つの要素」として、①自分を知り、受け入れる、②他者に共感し、つながる、③共に取り組み、創り出す、④社会に参画し、還元する、を挙げている。

辰野まどか (たつの まどか)

コーチング専門会社に勤務後、米国の大学院に留学し、Intercultural Service, Leadership and Management 修士号取得。2012年12月に一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)を立ち上げ、地球市民育成推進のための活動を開始。研修、講演、コンサルティング等を行う。明治学院大学国際学部国際キャリア学科非常勤講師(サービスマネジメント担当)。